

解釈と文法

古典文解釈のための語法

坂 本 元 太 郎

文法は、言語主体がその思想や感情などの心的内容を表現する場合、言語の用い方に関する社会的ルールであるという意味で、表現上の枠組み、形式的な約束事ということが出来る。そうした観点に立てば、文法はなにが表現されているかという内容的事柄にまで関係し立ち入るものではなく、それとはおのずと領域を異にするものというべきである。しかし表現の枠組みを通して、その意味内容を誤りなく理解する方法としての、いわゆる「解釈文法」は、客観的な科学的文法や理論的文法と異なって、技術的で実用的な点を主とする文法でもあるので、古典文を読解する場合の必要度は極めて高い。古典文は、言語の枠組みそのものが、過去の間接的で観念的な世界に属しているものであり、それを追体験によってしか共有できない性質のものであるだけに、ルールとしての文法は不可欠にして重要であることは論を俟たない。

夕月夜をぐらの山に鳴く鹿の声のうちにや秋はくるらむ

(古今集・巻第五)

「暮る」と「来る」のいずれであるかは、下接の「らむ」の接続と上の語の活用形によって決定されるわけだが、まさに文法的な領域内の問題であるだけに明快である。古典文読解の文法といっても、各品詞の認定・機能・意味・形態などを品詞ごとに扱う、いわゆる品詞論を主とした文法は、基礎的文法力として重要であることは当然であるが、その段階にとどまるかぎりでは、生きた文法力とはなり得ないのであって、たとえば品詞論的な立場から取り上げるにしても、具体的な文章や文脈の中での用法や機能に留意しながら、各品詞や活用形などの果している役割や、負担している文法的意味を見届けるところまで至らなければならぬ。動詞に関してそれを考えるなら、動詞の種類・活用形が誤りなく認定できるという前提に立って、その上に、たとえば連用形や連体形などの活用形が、どのような具体的なはたらきを負担しているのか、さらにそれが解釈する上でどう結びつくのかという事柄にまで発展していく必要があるのである。

その観点からも、品詞論を前提とした文章論的な文法力こそ、読解のポイントとなるわけであるが、以下、古典文読解に際して特に問題があると考えられる語法、および技術的・実践的に処理が可能ないくつかの語法に関して考察を加えてみたい。ただ、以上の目的からも察せられることとは思いますが、純粹に文法的な範疇に属するとはかぎらない事柄にも、必要に応じて触れる考えであるので、ご了承をいただきたい。

I

〈係助詞「こそ」……已然形〉における特殊用法

古典文に特有な現象である「係結」は、叙述上の呼応関係の一つであるが、本来はその名称が示しているように完結性を持ったものである。つまり、すべての係結は、形式的には完結性と統括性とを具備する上に成り立った現象であるが、中には形式上はともかくも、意味上完結性と統括性を失い、以下の叙述と逆接の論理関係に立つ場合がある。それは、以下の叙述とは一種の並列関係を構成するものであるが、その場合を検討してみると、文構造上または意味（解釈）上いくつかの種類に分類することができそうである。

1 様あしき御もてなし故こそすげなうそねみ給ひしか、人がらのあはれに情ありし御心を上の女房なども忍びあへり。
（源氏物語・桐壺）

2 品かたちこそ生れつきたらめ、心はなか賢きより賢きにも移さば移らざらむ。
（徒然草・第一段）

3 みな人しろしめしたる事なれど、朝成の中納言と一条摂政と同じをりの殿上人にて、品のほどこそ一条殿に等しからね、身の才、人のおぼえやんごとなき人なりければ…。
（大鏡・第三卷）

4 昨日こそ早苗とりしかいつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く
（古今集・巻第四）

5 植ゑし植ゑば秋なきときや咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや
（古今集・巻第五）

右の諸例は、いずれも係助詞「こそ」を受けて已然形で終止する、いわゆる第三終止法によって完結しているが、形態上はそうではあっても、意味内容の上では、「こそ…已然形」の係結による内容を強く肯定しながら、次にそれと順応しない事実を結果として下にとる、いわゆる強勢逆態接続の用法を持っているとみることが出来る。したがってその意味では、「内容上完結しない係結」として、句点なしで処置した方がよいと思われるが、上記の諸例は、

ともに、1「そねむ―忍びあふ」、2「(品) 生れつきたり―(心) 移さば移らざらむ」、3「(品) 一条殿に等しからず―(才・おぼえ) やんごとなき人」、4「早苗とる―稲葉そよぐ」、5「花散る―根さへ枯れず」などのように、上下二文(二語)が内容的に相対立した表現となっていることが特色として注目される。このような場合は、第三終止法によって統括される部分が、以下の文章に対する説明または補足などの用法をもった、いわゆる「はさみこみ(挿入句)」と考えることは妥当ではない。「花橘は名にこそ負へれ、^④なほ梅の句にぞ古へのことも立ち返り恋しう思ひ出でらるる。」(徒然草・第一九段)の場合も「花橘」と「梅の句」とが対立的にとらえられていて、傍線^⑤の部分が、傍線^⑥の部分に対して説明や補足の関係に立つものではないと考えられるから、挿入句とするには問題があろう。近似した表現ではあるが、たとえば、

6 八重葎茂れる宿の寂しさに人こそ見えね秋は来にけり

(拾遺集・卷第三)

7 わが袖は汐干に見えぬ沖の石の入こそ知らね乾く間もなし

(千載集・卷第一二)

前例は「人―秋」の対比がある点で、挿入句とは考えられないが、後例は、傍線部分が以下の表現の「乾く間もなし」を補足・説明していると考えられ、さらにまた、「乾く間もなし」の部分が「わが袖は」の部分の主語とした述語(節)であることに着目すれば、「人―乾く」といった対比的関係が成り立たないので、挿入句として処理するのが適切である。また次の例のように、

8 すさまじきもの：人の国よりおこせたる文のものなき。京のをもさこそ思ふらめ。されどそれはゆかしきことども書き集め世にあることなどをも聞けば、いとよし。

(枕草子・第二五段)

「こそ…らめ」の強勢表現が、言外に逆接的気分を持ちながらも、さらに接続詞「されど」を加えることによって、逆接の論理関係を意図的に確認している場合も見受けられる。「京のをまさこそ思ふらめ、それはゆかしきことども書き集め…」というように言い換えても十分に同義であることを考えると、接続詞を用いていることと相俟って、挿入句でないことは明白である。

9 思ひ出でて忍ぶ人あらむほどこそあらめ、そもまたほどなく失せて、聞き伝ふるばかりの末々はあはれとやは思ふ。
(徒然草・第三〇段)

10 おほかたのよしなしごとを言はむほどこそあらめ、まめやかなる心の友には、はるかにへだたるところありぬべきぞわびしきや。
(徒然草・第一二段)

11 まことならばこそあらめ、おのづから聞き直し給ひてむ。
(枕草子・第八二段)

これらの「こそあらめ」は、一種の慣用表現と考えられる。つまり係結による逆接条件を以下の文との間に成立させながら、「あり」という動詞に許容の意味を負担させたものと考えられる。このような場合は、動詞「あり」を補助動詞化して、一方では文意に相応する語を補って、「ほどこそよくあらめ」、「ほどこそともかくもあらめ」などのように解釈すると理解が容易である。その意味では一種の省略とも考えられもするが、当時の慣用的な特殊表現とみてよい。

一般的な「こそ…已然形」のかたちが、形式化し慣用化するにしたがって、9 10 11の用例に見た「こそあらめ」のかたちや、また以下に述べる「こそあれ」のかたちをとって表現されるようになる。このような表現における動

詞「あり」は、単に許容の意味を持つものと考えるよりは、もっと複雑な色合いを帯び、文章全体から帰納して解釈を試みる必要があると考えられる。

12 人々立てるが、「あれは物詣人なめりな。月日しもこそ世に多かれ。」と笑ふ中に…。(更級日記)

「しもこそ…多かれ」のかたちだが、さらに抽象化され単純化されて、「しもこそあれ」↓「もこそあれ」↓「こそあれ」のかたちに推移したものと思われるが、事実、「月日しもこそ(世に)多かれ」↓「月日しもこそ(世に多く)あれ」という表現が導いたものとして、「月こそあれ、この月に君に逢ひたる不思議さよ。」などの例が考えられる。こうした場合は、係助詞「こそ」の上に単独の名詞が置かれることが多いようである。

13 今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを。(古今集・卷第一七)

「今」と「昔」の対比から理解できるように、二語を含む④と⑤の部分が意味上対立的な関係になっている。こうした場合は⑥の部分の意味を要約しうる語「昔は…さかゆく時もありこし」と反対の意味を、④の「あり」に負担させてみる必要がある。したがって、「今デコソ年ヨツテシマッタガ」といった解釈が成り立つことになろう。

14 花もやうやうけしきだつほどこそあれ、をりしも雨風うち続きで、心あわただしく散り過ぎぬ。

(徒然草・第一九段)

この用例の場合は、語法的には次のように a・b 二様の解釈が成立する。

a (花もやうやうけしきだつ) 頃まではともかくも(まあいいが)、しかしながら…。

b (花もやうやうけしきだつ) そんな頃に…。

aは逆接の用法と考えたもので、「あり」に許容の意味を持たせた場合の解釈であるのに対して、bは係結を慣用的な強調表現に解釈したものである。^(注1)この場合における「こそあれ」における「あり」の語性は、「中垣こそあれ、一つ家のやうなれば望みてあづかれるなり。」(土佐日記)にみえる「あり」が、存在の意の實質の意味を持っているのに対して、aの見解および9・10・11の諸例における「あり」では、やや實質の意味が不明瞭となり、さらにbの見解に至っては、「あり」が全く實質的な意味を失って形式化してしまうとともに、論理的には逆接の意味で下に承接することをも失なってしまうに至ったことを意味している。その結果、「こそあれ」が、「花もやうやうけしきだつほど」という連用修飾語を、単に強調するにすぎないことになってしまったと考えられるのである。しかしそのように考えるにしても、aとbの見解は相互に有縁なものであって、基本的に近似したものではないだろうか。本来は「程こそあれ」は、「ほどこそあれ(シカシ)：」の意味で、したがって「ほどあれど：」と同義になり、係結を除去した表現で代用できるにつれて、「(花もやうやうけしきだつ)時はあるが(しかしそれは短かくて)」という意味を含み持っているわけである。それがさらに要約されて、「(花もやうやうけしきだつ)そんな短かい時に：」となったものと解され、aとbの見解は全く異質のものではなさそうである。

以上は、「こそ：已然形」のかたちだが、逆接の関係をとりながら下と接続する場合、その諸種のタイプについて考察を加えたのであるが、同じ用法は「ぞ：連体形」の第二終止法の場合にも見受けられる。

15 緑なる一つ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける
(古今集・巻第四)

16 見せばやな雄島のあまの袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず
(千載集・巻第一四)

形式的には両歌とも句切れを持っていて、前者は三句、後者は四句で切れている。したがって、そこではっきり終止させて口訳することも場合によって可能であろうが、不自然さはまぬがれ得ない。やはり言外の気分としてはそれぞれ第四句(15の歌)、第五句(16の歌)と逆接的な関係にあると考えるのが適切であり自然である。

II

未然形と已然形に承接した「ばこそ」の語性と解釈

接続助詞「ば」に、係助詞「こそ」が承接した「ばこそ」のかたちは、中古の作品にも散見されるが、どちらかといえば中世以降に頻出する語法である。活用語の未然形に承接する場合と、已然形に承接する場合とは、明らかに語性を異にし、当然、口訳に際しては注意を必要とするものである。

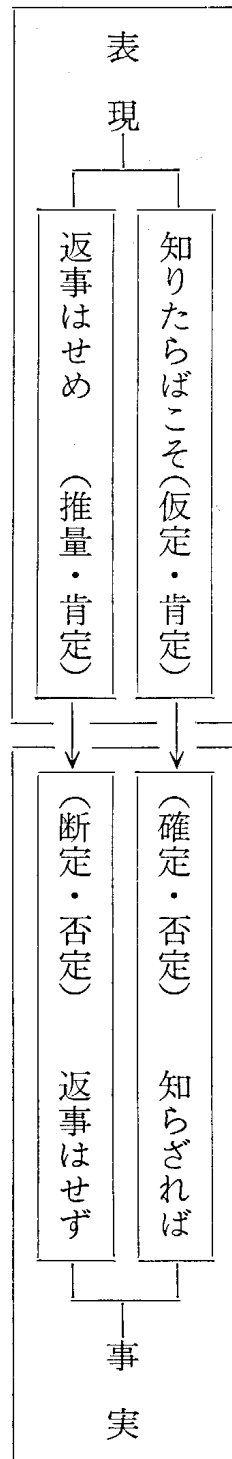
〔A〕「未然形+ばこそ」の形の場合

仮定条件を強く表面に出して指示した結果、事実を裏面に余情として含め、結果として表現と反対の事実を述べたかたちである。したがって、書かれている仮定的な事柄を否定したところ―つまり表現と逆なところに意図した事実があるという点で反語表現との類似を見る。その意味では、むしろ一種の反実仮想表現ということも可能なのである。

1 「これに都より流され給ひたる法勝寺の執行俊寛僧都と申す人の行方や知りたる。」と問ふに、法勝寺とも執行とも知りたらばこそ返事はせめ、ただ頭をふって知らぬといふ。

(平家物語・卷三・五)

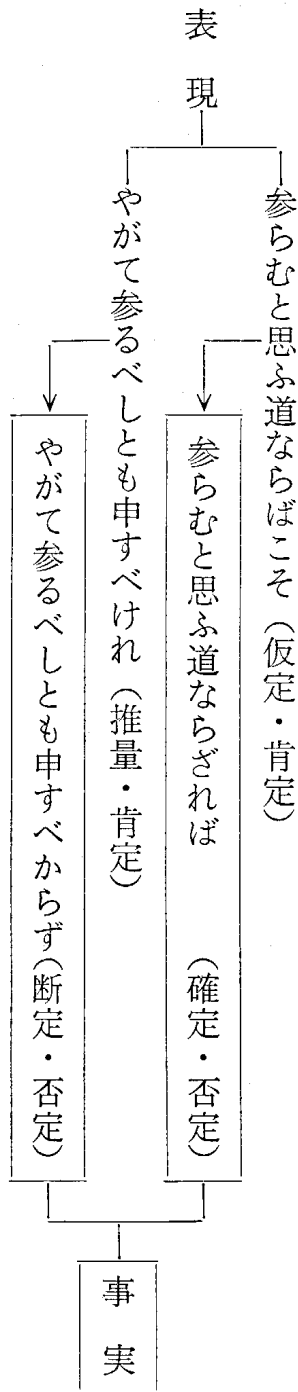
条件句①と、それを受ける句②とが対応しているの、その点では解釈—事実関係がはっきりするが、これを「法勝寺とも執行とも知りたらしましかば返事はせまし」と表現を変えても事実関係において違いはないであろう。試みにこれを図示すれば、



2 参らむと思ふ道ならばこそ、やがて参るべしとも申すべけれ、なかなか参らざらむもの故に、なんと御返事をば申すべしともおぼえず。

(平家物語・卷一・三)

の例にしても同様な手続きで次のように理解することができる。



結局のところ、「参上しようと思っっているのならば、すぐさま参上しようとも申しましよう。」という表現は、「(私ニハ)参上しようという意志がないから、すぐ参上しようという返事を申し上げるつもりはないのだ。」という事実を、仮定的・肯定的に述べたものなのである。

以上の二例は、ともに条件句とそれを受ける句とが対応しているので、解釈上問題はないが、場合によってはその対応がくずれ、条件句のみが表現され、それを受ける句が省略されることが多いので注意を要する。

3 何とて俊寛をば読み落とし給ふぞ、御名はあらばこそ。赦免状の面をござらん候へ。(謡曲・俊寛)

4 何と勸進帳を読めと候や。なかなかのこと。心得申して候ふ。もとより勸進帳のあらばこそ。笈の中より往來の巻物一卷取り出し、勸進帳と名づけつつ高らかにこそ読み上げけれ。(謡曲・安宅)

解釈に当っては、省略された表現を補って考える必要がある。「御名はあらばこそ(読み候はめ)」↓「御名はあらざれば(読み候はず)」とすれば理解は容易である。4の例にしても、事實は「勸進帳のあらざれば(読み上ぐべからず)」とでもなるべきところである。また文章の続き具合によっては、省略部分を意識しなくても、次のように簡便化して考えるのも一法かと思う。

5 仏御前これを見て、あまりにあはれにおぼえければ、入道殿に申しけるは、「あれはいかに、妓王とこそ見まゐらせ候へ。日頃召されぬ所にも候はばこそ。これへ召され候へかし。(平家物語・卷一)

「日頃召されぬ所にも候はばこそ。(假定・肯定)」↓「日頃召されぬ所にも候はざれば、(確定・否定)」と戻して、それを代入して下にかけていくわけである。

〔B〕「已然形+ばこそ」の形の場合

この用法は、係結による「強調表現」で、前述の「未然形+ばこそ」の用法とは全く異質である。

1 立田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散るらめ
(古今集・巻第五)

確定条件の原因・理由を表わす用法として最も一般的なものである。しかし次のように、已然形に直接「こそ」が承接している場合もある。

2 我はうるはしき友なれこそとぶらひ来つれ。〔我者愛友故弔来耳〕
(古事記・上卷)

3 歎きつつますらをのこの恋ふれこそ吾が髪結の漬ちてぬれけれ
(万葉集・巻第二)

4 後瀬山後も会はむと念へこそ死ぬべきものを今日までも生けれ
(万葉集・巻第四)

右の諸例などは、1「友なれ(ば)こそ」、2「恋ふれ(ば)こそ」、3「念へ(ば)こそ」の意味に考えて、接

続助詞「ば」を補なうことが必要である。

「こそ：已然形」のかたちが慣用化したものに「こそあれ」がある。これに関してはすでに述べたが、それに「ば」が上接した「ばこそあれ」のかたちも多く見受けられる。

5 思ひ出づるときはの山の岩つつじ言はねばこそあれ恋しきものを
(古今集・巻第一)

6 つつしむことのみあればこそあれ。さらに来じとなむわれは思はぬ。
(蜻蛉日記)

「こそ」と「あれ」の中間に省略語があると考えられる例で、5「人にはわからないが」、6「訪れず」などを補ってみるとわかりよい。一方こうした例は、「未然形+ばこそ」の場合にも見られる。

7 悲しともまたあはれとも世の常にいふべきことにあらばこそあらめ

(建礼門院右京大夫集)

右は前述のように、「こそあらめ」の「あり」に、許容の意味を持たせたとも、また「(よく)あらめ」などの省略とも解し得るものである。同様に、

8 年ごろもあればこそあれ、そのこと待たむほどあらじ。ものさわがしからぬやうに…。

(徒然草第五九段)

などにしても、「こそあれ」が慣用化し、形式化して強調表現となってしまうものとも考えられるし、また「それでよいのだ」といった許容の意味を含み持ったものとも受けとれよう。

III

〈体言十の十…連体形〉の構文と解釈

古典文に頻出する構文であって、その形式の多様さや格助詞「の」の、格の認定をめぐって、いくつかの重要な問題を提示している。この構文における格助詞「の」について、特にその格をどう認定するかということに関しては、以前にもとくにその実態を通して考察を加えたが(「連体格助詞『の』の周辺」・札幌大学紀要・第二号・昭和四六年三月)、その要点を整理してみると、

- a 同格とは、連体格の用法における一つの関係やあり方を示すものとして取り扱うべきものではないか。
- b その観点から、ほかの格との位取りの違いを明らかにさせて、同格という名称は用いないで、同等とか対等

とかの名称を用いてはどうか。

- c この構文における「の」の上下部分は、客観的には同一存在（対象）に関する表現ではあっても、主観的な認識の段階では、二様の異なった認識が存在していて、短絡に上下が同一内容であるとは考えられないこと。
- d この構文を支える発想は、民族的なもので伝統的に定着したものであるが、漢文訓読の影響を無視できないこと。

といった諸点であり、またこの構文の型態的変遷を歴史的にとらえて、

- ① a 伏せ庵の曲げ庵のうちに直土にわら解き敷きて……。

（万葉集・卷第五）

- b 風まじり雨降る夜の雨まじり雪ふる夜は……。

（万葉集・卷第五）

此頃世にあらむ事のすこし珍しくねぶたささめぬべからむ事語りて聞かせ給へ。

（源氏物語・常夏）

下わたりに品いやしからぬ人の事もかなはぬ人を憎からず思ひて、

（堤中納言物語）

- ② 親のおはしける時より使ひつけたる童のされたる女ぞ後見とつけて使ひ給ひける。

（落窪物語）

綿もなき布肩衣の海松のごとわわけさがれる襦袢のみ肩にうちかけ……。

（万葉集・卷第五）

- ③ a 中納言なる人の御女あまた持ち給へるおはしましき。

（落窪物語）

- b 白き鳥の嘴と脚と赤き鳴の大きさなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。

（伊勢物語）

- c 男の童のものおぢせずいふかひなきを……。

（堤中納言物語）

①の場合は、「の」の上下に同一の体言を置いた形であるが、aに比較して、bは体言修飾の部分が連文節となっ

ている形。②は上下に位置する体言が同一でない場合―したがって、体言が上下に置かれている点では①と同じであるが―。③は下に來るべき体言が省略され、連体形が準体言として定着した場合で、aは単一の連体形で、bは対等の関係にある連体形によって統括され、cはbと同じく対等ではあるが、一方が中止法の形となっている場合である。万葉集などには①の型が多く、③の型が少ないことから、また第二体言の省略、文の複雑化からも、歴史的には①→③の過程を辿ったであろうことは推察できるが、助詞「の」に接する上下の部分が、次第に長文化・複雑化してきているという事実は、それに従って、言語主体の、一つの事実に對する捉え方なり、意識・心理なりの点で、かなりの違いや深化が見られるということをも意味するものである。

と整理してみたが、以下、解釈に視点を置いて、本構文に考察を加えることにしたい。

句欄のもとに清きかめの大きなるすゑて、桜のいみじくおもしろき枝の五尺ばかりなるをいと多くさしたれば、句欄のもとまでこぼれ咲きたるに、昼つ方、大納言殿、桜の直衣のすこしなよらかなるに、濃き紫の指貫、白き御衣ども、うへに濃き綾のいとあざやかなるを出してまゐり給へるに……。

(枕草子・第二三段)

右のどの用例も、型態分類の③に属するものであり、ともに単一の連体形によって統括されている点で下位分類のaに相当する。「清きかめの大きなるすゑて」という表現の意図するものは、認識の対象となる事物(「かめ」)が存在して、一面から見るとそれは「清き(かめ)」なのであり、また同時に他面から見ると、それは「大きな(かめ)」でもあって、言語主体がそれぞれ異なった視点に立って認識した事実を、「の」を介することで一つのまとまりとして表現しようとするところにある。もちろん、上下の認識や内容には、心理的強弱や比重の違いはあろう

が、そこに言語主体の、一つの対象に関するかわり合いの違いを見ることが出来る。総論から各論へ、一般から個別へといった発想形式がそこに認められるのであるが、「の」の上下の内容が、明らかに等価値・同質ではないにしても、対等であるところから、一般にはこのような語性の「の」を同格と規定しているが、「同格」という名称自体には、多分に問題があると思われる。^(注2)

口訳に当っては、一般に「デ」「デアッテ」「デアッテ、ソノウエ」などとしているが、便宜的で技術的な解釈であり、「の」の本質を見失うおそれが多分にある。基本的には「AのB」というかたちで要約される連体機能そのものが、結果的に種々の意味の現代語に相当するという事実を考え合わせると、連体格の意味負担の広さという点でも、「連体格」と規定した上で上記のような口訳を当てるのが適當ではないであろうか。

本構文における以上の「の」は、論理的な視点からだけ考えると、下の連体形(「大きな」を上を「かめ」)の連体修飾として機能させて考えることと同一である。「関係代名詞的用法」という便宜的説明がなされるのも、こうした事情に起因するものであろう。たしかに比較言語学的にみれば、技術的・啓蒙的には理解できるのである。しかし、この構文を支えている言語主体の心理の側からみると、「関係代名詞的用法」と捉えることは妥当とは思われない。なぜならそれは前述したように、「全体から部分へ、巨視的なものから微視的なものへ、総論から各論へ、一般から個別へ」という叙法の変化や深化を内在させた発想に支えられた表現であるからである。こうした表現心理を無視することは、論理的には誤りではないとしても、やはり問題が残ろう。その意味でやや不自然な感があるが、口訳に当っては、「美しいかめデ(デアッテ) 大きいのを」とでもせざるを得ないであろうか。とりわけ下の連

体形と、「の」との距離が大きい場合、たとえば、

すこし曇りたる夕つ方、夜など、忍びたるほととぎすの遠く（そら耳かと覚ゆるばかり）たどたどしきを聞きつけたらむは、なに心地かせむ。
（枕草子・第五段）

童の頭ばかりつくろひて、なりはみなほころびたえ、乱れかかりたるもあるが、履子・履などに、「緒すげさせ、裏をさせ。」などもてさわぎて……。〔枕草子・第五段〕などの用例、および特に極端な次の例、

かたちきたなげなく若やかなるほどの、おのがじしは塵もつかずと身をもてなし、文を書けどおほどかに言えらびをし、墨つきほのかに心もとなく思はせつつ、またさやかにも見てしがなとすべなく待たせ、わづかなる声聞くばかり言ひよれど息の下に引き入れ、言少ななるがいとよくもてかくすなりけり。
（源氏物語・帚木）

などにおいては、関係代名詞のように下から口訳して体言の修飾語句とすることは、不自然になるか、または全く不可能となつてしまい、望ましいことではない。

解釈に當つて注意すべきことは、言うまでもなく文脈を正しくとらえることである。本構文における連体形に下接する助詞には、格助詞（が・に・を）係助詞（は・も）などがある。助詞の種類によつて下の表現との関係が異なつてくるのは自明のことであつて、主格・連用格のいずれに立つのか、その関係を吟味してかからねばならない。ところで連体形に下接する助詞は、しばしば省略されるので、その場合は特に下の表現との関係を考へて、適当な格を予想し、それに相応した助詞を補つて解釈しなければならぬ。

除目に司得ぬ人の家、今年はかならずと聞きて、はやうありし者どものほかほかなりつる、かた田舎に住む者

どもなど、みな集まり来て…。

(枕草子・第二五段)

この構分は、前述の型態上の分類からは、①のbに相当するもので、上下に同一の体言「者ども」を配したかたちである。第一連体形「ほかほかかなりつる」と「かた田舎に住む」とが、対等の関係で下の体言「者ども」にかかるとみてよい。したがって、

はやうありし者ども（者ども）／＼
ほかほかかなりつる（者ども）
かた田舎に住む 者ども などが

と考えるべき構文である。助詞「が」を補って、「みな集まり来て」と主述関係にあることを確認したい。

また髪をかしげなる童の袖どもほころびがちにて、袴はなえたれど色よきうちきたるa三四人きて、「卯槌の木bのよからむb切りておろせ。お前にも召すぞ。」などいふに…。

(枕草子・第一四四段)

などの場合も、a「が」b「を」を補ってそれぞれ主格と連用格と考えるべきケースである。

本来は、これと同じ構文でありながら、格助詞「の」が表記されずにある場合も散見される。つまり、第一体言が、助詞「の」を介しないで下の連体形に続く場合である。

むすめ、ただひとり侍りし、亡せてこの十余年にやなり侍りぬらむ。

(源氏物語・若紫)

「今日はじむべき祈りども、さるべき人のうけたまはれる、今宵より。」と聞え急がせば…。

(源氏物語・桐壺)

この折に、ある人々、をりふしにつけて、漢詩ども、時に似つかはしき、言ふ。

(土佐日記)

二重傍線部の連体形は、その機能からすれば、第一体言である「むすめ」「祈りども」「漢詩ども」の説明・細叙

であつて、その意味では「の」を伴つた場合と同じである。論理的には確かに同一と考えてもよいが、一方、「の」の有無によつて、表現上微妙な違いが認められるようである。つまり「の」がある場合は、ない場合に比較して、連体形（準体言）との関係が明白であり、叙述の上で中断が感じられないということである。このことは、助詞「の」が、たとえば「が」などと異なつて、下の連体形（準体言）を志向する性質が強い結果、「の」の前後の関係や脈絡が、かなりはつきり捉えられるためで、この点に「の」の持つ文脈志向性が看取されるのである。一方、「の」を伴わない表現を文構造から考えると、それを「の」の省略された表現とみるよりは、第一体言を説明補足するための挿入句と考えるべきものであろう。

IV

古典文特有の表現とその単純化による解釈

古典文には、現代語に見受けられないような特有の表現がある。それが古典文特有の現象であるだけに、これに対応する現代語のないことが多いが、もちろん古典語の領域では、本来的に存在理由を持つていたものであり、微妙な働きを負担していたと考えるべきものである。したがつて現代語の論理や語法の側に立つて、古典文特有の意味合いやニュアンスを捨て去ることは、必ずしも望ましいことではないのであるが、解釈という技術的なことに視点を置いて、古文特有な表現を単純化することにより、現代語表現との接点を考察しようと思う。

〔A〕 〈未然形＋助動詞「む」＋体言〉の場合

係結による第二終止法における連体形の「む」が、「切れる連体形」であるならば、ここで問題とするのは、下に体言を伴った「続く連体形」の「む」である。特に解釈上、種々の見解を生むことが多いので取り上げてみるわけである。

周知の事ではあるが、助動詞「む」の本義ならびに用法を説明したものに「あゆひ抄」がある。今、本稿に關係する部分にかぎって引用の上、考察をしてみる。それによれば、「む」の本義を、「未だしかあらぬことをはかりあらましていふ」点にあると規定し、これをふまえながら、「裏」(第一人称者)と「表」(第二・第三人称者)のいずれが主語としてかかわるかによって、「推量」はもちろん、「意志」「命令」などの具体的意味や用法が成立してくるものだとしている。つまり、基本的には「未確定・未実現の将来に関する推量」に原義があつて、それが人称との関連などの具体的な条件によつて、種々の意味を生むという見解である。

「続く連体形」の「む」を、「あゆひ抄」と同じ視点から考えると、原義である「推量」の意味から転じて、「仮想」とか「婉曲」とかの意味になつたと考えてよいと思うが、人称との關係はともかくとしても、基本的には理解できるものである。現在、文法書などでは、連体形の「む」に「仮想」と「婉曲」の二義を負担させているのが普通であるが、典型的な例は別として、実際にはその区別が容易ではなく、いずれに解しても誤りとは言えない場合がかなり見受けられる。

1 いま秋風の吹かむをりにぞ来むとする。

(枕草子・第四三段)

2 親にも君にも、すべてうち語らふ人にも、人に思はれむばかりめでたきことはあらず。

(枕草子・第二六七段)

3 佐々木四郎高綱宇治川の先陣ぞや。吾と思はむ人々は高綱に組めや。

(平家物語・卷九)

4 さて世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひのほからうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ限りなくめづらしくは覚えめ。

(源氏物語・帚木)

5 未だ天の明けざらん前に、勝負を決せん条、何の疑か候ふべき。

(保元物語)

6 人麿は赤人が上に立たむことかたく、赤人は人麿が下に立たむことかたくなむありける。(古今集仮名序)

以上のうち134 (a・b) 56の用例は、どちらかと言えば仮想の意の強くない——したがって婉曲の用法と考える方が妥当なものを挙げたが、問題がないわけではない。また2の例を婉曲の意に解するとしても、「人ニ愛サレルヨウナコトグライ」としても落着かないし、また仮想に受けとれもする。1にしても「秋風が吹クヨウナ時」と口訳しても、不確かな断定とも比況とも解されるおそれが生じ、ともに意味がずれてしまつて相当する現代語が見当らない。それよりはむしろ現在法に置きかえて、「秋風が吹クトキ」と言ったほうが現代語として安定する。5の例は仮想とするには不自然であると思われるが、3の例など「吾ト思ウ自信アル者ガイタトシテ、ソノ人々ハ」と仮想にとつてもよいだろうが、いかにも不自然な感じは否めない。

ところで、場合によっては、仮想(仮定のもとに推量する)の意に解した方が適切であると思われるものもある。つまり、上に仮定条件が示されないで、「む」がそれを代用していると思われる場合である。

7 まことに、その方を取り出でむ選びに、かならずもるまじきはいと難しや。

(源氏物語・帚木)

8 まことのうつはものとなるべきを取り出ださむには難かるべし。

(源氏物語・帚木)

などは相対的に婉曲よりも仮想ととる方が適切かと思われるが、いずれにしても明確に決しうるものではないはずである。ただ強いて割り切るなら、24(c)78の例のように、それぞれ推量の助動詞(じ・む・まじ・べし)と対応している場合は、仮定条件を受ける表現と見れないこともないので、仮想の意としてよいかとも思うが、今後に俟ちたい。

「あゆひ抄」の立論にあるように、「未確定・未実現の将来に関する推量」が、「む」の本義であるとするなら、その推量を前提にした言い方や表現のし方で、現実感や事実感を稀薄にすること(仮想)も、また同時に、相手や対象について断定的な言い方を避けることで事実を隳化すること(婉曲)も可能なのであるから、仮想と婉曲とは本質的な違いはなく、したがってあれかこれかという二者択一の問題ではないと考えられる。

9 思はむ子を法師になしたらむこそ心ぐるしけれ。

(枕草子・第七段)

a 推量(親ガ、カワイイト思ッテイルデアロウ子ヲ法師ニシタデアロウコトコソハ)

b 婉曲(親ガ、カワイイト思ッテイルヨウナ子ヲ法師ニシタヨウナコトコソハ)

c 仮想(モシ親ガ、カワイイト思ッテイル子ガアツタトシテ、ソノ子ヲ法師ニシタナラ、ソレハ)

9の用例について、abcの立場から直訳的に解釈を試みたわけであるが、推量・婉曲・仮想の意味を誇張して訳出すると、かなり現代語として不自然なものになってしまふ。aの解釈はその極端なもので、「思はむ子」「来む人」「行かむ時」が、それぞれ「愛シテイルデアロウ子」「来ルデアロウ人」「行クデアロウ時」と訳出し、「む」に

相当する口語助動詞「う」を代入してすませるのは問題で、現代語としてはむしろ「愛スル子」「来ル人」「行ク時」の方が正しいしつきりする。このことは一面から考えると、現代語と異なって古典文の場合には、厳密に時制の対応を守る言語習慣が存在したことを裏づけるものであり、それと無縁ではない。現在では、「明日でかける時に」などと言って、未来に関する事柄については、すべてではないにしても、現在法で表現することが多い。一方、過去の事柄の場合は、「昨日行った時に」と時制の制限を受けて一様ではないが、古典では時制の対応が現代語より厳格であったことを示すものであろう。ともあれ、仮想・婉曲のいずれに解しても、用法と解釈が矛盾していなければそれでよいのであって、その点に注意することで十分であると考えられる。本来、仮想も婉曲も、推量の意味を離れたものではなく、ただそれぞれの場合に応じて、意味に傾きが生ずるものであるにすぎない。だから、推量の意味の比較的稀薄な「連体形・む」特に「婉曲」の場合などは、訳出する必要が必ずしもないと考えるのである。

〔B〕 〈あり（侍り・候ふ）・す〉における補助動詞的用法と解釈

動詞「あり」が、存在の意味の実質概念を失って、単に叙述を成立させるのみの補助動詞として形式的に用いられる場合がある。語形に変化はなくても、語性に変質する点で注意を要するし、また解釈に当たっても、「あり」を含む構文を単純化することで、読解を容易にすることができる。すでに時枝氏もこの問題について論述されているが、^(注3)ここではそれと別な視点に立って、文構造の単純化による読解の要領を中心に考察することとする。

1 雨まじり雪降る夜は、すべもなく寒くしあれば堅塩を取りつづしろひ…。

(万葉集・巻第五)

2 品定まりたるなかにも、またきざみきざみありて、中の品のけしうはあらぬ、えり出づべき頃ほひなり。

(源氏物語・帚木)

3 また昼も夜も来る人を、なにしにかは、「なし」ともかがやき帰さむ。まことにむつまじうなどあらぬも、さこそは来めれ。

(枕草子・第七二段)

本来は、1「寒くしあれば↓寒ければ」、2「けしうはあらぬ↓けしからぬ」、3「むつまじうなどあらぬ↓むつまじからぬ」とあるべきものであるが、助詞「し」「は」「など」の語が介入したために、形容詞連用形と陳述の補助動詞の「あり」に分離したものである。

4 ただ文字一つに、あやしう、あてにもいやしうもなるはいかなるにかあらむ。

(枕草子・第一九五段)

5 「歌などよむにやあらむ。兵衛の佐、返しおもひまうけよ。」など笑ひて…。

(枕草子・第三五段)

6 詞の足るまじきにもあらず、心の及ぶまじきにも侍らねど、つつまし、はづかしと思ふに…。

(紫式部日記)

7 すべて世の中ことわざしげく憂きものに侍りけり。

(紫式部日記)

8 これは三保の松原に、白竜と申す漁夫にて候ふ。

(謡曲・羽衣)

9 世の中になほいと心憂きものは、人に憎まれむことこそあるべけれ。

(枕草子・第二六七段)

10 男こそなほいとありがたくあやしき心地したるものはあれ。

(枕草子・第二六八段)

4と5の例は、係助詞が介在して、断定の助動詞「なり」が、連用形「に」と「あり」とに分離したものと見る

ことができる。その場合に下の「あらむ」などの語句が省略されることも多いので、解釈に際しては補ってみる必要がある。また6のa bは係助詞「も」が介在して同じ現象を起こし、さらに6のbと7は「侍り」の敬語使用によって、また8は助詞「て」を介在させたために「なり」が分離したものである。本来的には、7は「憂きものなりけり」、8は「漁夫にてあり↓漁夫なり」がその実質的意味なのである。

以上のように、助動詞「なり」が分離して、「に」と「あり」とを派生せしめる事情には、いくつかのケースが考えられる。また、9と10の例は、ともにこの表現のままでは文意が把握しにくい。このような場合は、補助助動詞「あり」に対応する断定の助動詞「なり」の連用形「に」を、係助詞「こそ」「は」の上に補入してみると容易である。すなわち、9の例は、「憎まれむことにこそあるべけれ↓憎まれむことにあるべし↓憎まれむことなるべし」という方向に、また、10の例の場合は、「男こそ…心地したるものにはあれ↓男…心地したるものにはあり↓男…心地したるもの|に|あり↓男…心地したるものなり」という方向に、それぞれ簡略化できるわけである。つまり、「に」の補入↓係結の除去↓「にあり」を「なり」に置きかえる、という手順で口訳するとよいわけである。

右の例に関するかぎり、「にあり」のかたちは「なり」に等しく、陳述機能を持ったものであるが、同じ「にあり」のかたちでも、たとえば、

家|に|あれば|筥に盛る飯を草枕旅に|し|あれば|椎の葉に盛る。

(万葉集・巻第二)

の場合は、言うまでもなく動詞の用法である。また一方では「なり」のかたちを取りながら、断定の意ではなく

存在の意の助動詞となる場合もある。

11 ひさかたの天の露霜置きにけり家なる人も待ち恋ひぬらむ

(万葉集・巻第四)

12 吉野なる夏実の河の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして

(万葉集・巻第三)

13 富士の山はこの国なり。

(更級日記)

存在の意の「なり」は、本来は「に(格助詞)+あり(動詞)」ということ、その縮約したものであるから、格助詞「に」の意味が強く残ったまま助動詞化したものと見ることが出来る。この用法は、11 12の例でもわかるように、ふつうは連体形にみえるものであるが、13の例のように終止形の場合、または連用形の場合にも見受けられること(注4)ができる。

「あり」(侍り・候ふ)などの系統の語が、補助動詞の用法を負担するときは、「にあり」のかたちの場合にかぎるものではない。自明なことではあるが、助動詞「べし」または「ず」の連用形に助詞が添ったかたちに「あり」系統の語が接続した場合にもみられる。

14 高き山の嶺の下り来べくもあらぬに置きて逃げ来ぬ。

(大和物語)

15 いつしかみ崎といふ所にわたらむとのみ思ふを、風波ともにやむべくもあらず。

(土佐日記)

16 高砂の尾の上の桜咲きにけり外山の霞たたずもあらなむ

(後拾遺集・巻第一)

17 後の世も思ふにかなはずぞあらむかしとぞうしろめたきに…。

(更級日記)

右の諸例は、ともに14「下り来べからぬに」、15「やむべからず」、16「たたざらなむ」、17「かなはざらむかし」

と単純化しても論理的には誤りのないところである。以上1から17までにおける補助動詞「あり」の機能は、文の構造上からみると、介在する助詞によって一度叙述が中断された連用形が、再び「あり」によって下の語に続いていくと見ることが出来るから、このような「あり」は、上の連用形の意味を形式的に再現することによって、文構造を成立させている機能を持っていると考えられる。

サ変動詞「す」にも、以上述べた「あり（侍り・候ふ）」と同様な性格や用法が見られる。「あり」が「なり」に吸収されて助動詞として解釈を試みたように、補助動詞の「す」の場合も表現から省いて考えたと解釈が容易となることが多い。現代語の、「思いもしないこと」などの「し」がそれで、意味合いに若干の違いはあるが、「思わないうこと」の意に近似している。

- 1 しやせまし、せずやあらましと思ふことは、おほやうはせぬがよきなり。
(徒然草・第九八段)
- 2 夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬほどに月出でぬ。
(土佐日記)
- 3 音に聞く高師の浜のあだ波はかけじや袖の濡れもこそすれ
(金葉集・卷第八)
- 4 玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする
(新古今集・卷第一一)

右の例文の傍線部は実質的概念はなく、ただ形式的な文構造の上で、それがなければ叙述が成立しないという意味で置かれた補助動詞である。実際には以上のほかに、「として」「にして」のかたちをとることも多いが、その場合、動詞と補助動詞のいずれの用法であるか——つまり実質的概念を負担しているか、単に文構造上陳述のみを負担しているかの点で甚だ微妙なものが見受けられる。

5 等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして…。

(更級日記)

6 吉野なる夏実の河の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして

(万葉集・卷第三)

7 旅にしても恋しきに山下の赤のそほ舟沖に漕ぐ見ゆ

(万葉集・卷第三)

などは、それぞれ「手を洗うことをする」、「山かげに居る」、「旅に出ている」といった動詞本来の意味が認められるので問題はないが、3と4の例などは若干の疑義が残る感じもする。

8 見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめくらさむ

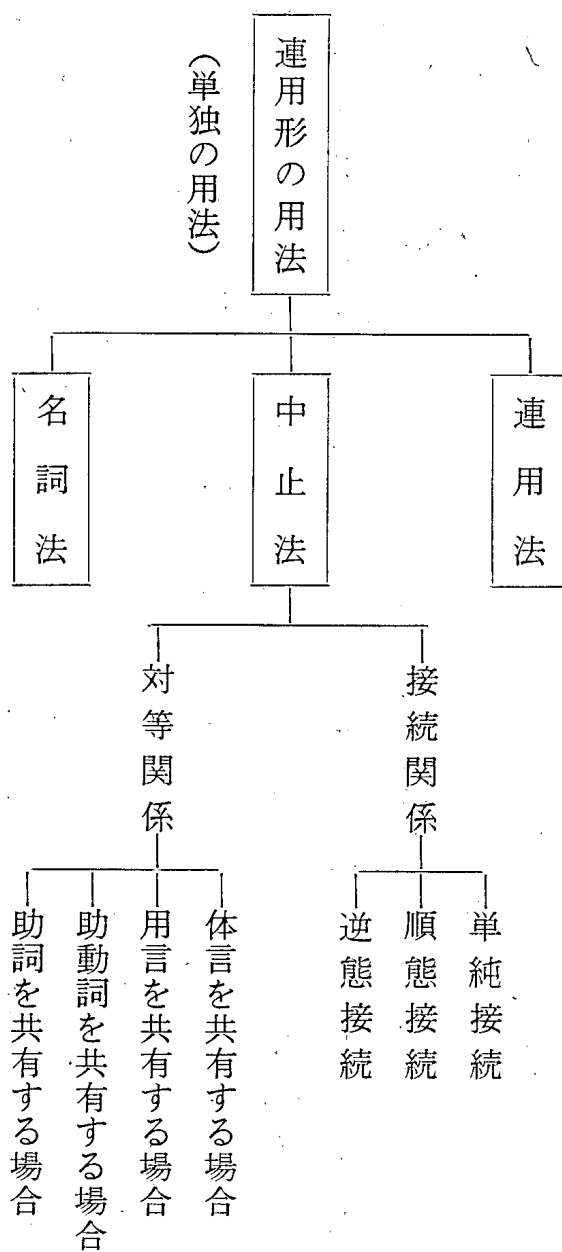
(古今集・卷第一一)

第一句は「見ナイトイウワケデモナク」と現代語では言うところだし、また第二句も「見(もせ)ぬ人の」の意に近いので、この場合は文構造に係した補助動詞と考えてよい。

V

特に問題となる連用形の用法と解釈

活用語の連用形は、連体形と並んで古典読解上のポイントとも言うべきもので、その用法及び名称に関しても諸説があつて定まらない感じが強い。以下、主として、用言の連用形を対象に、その負担している役割と解釈上で問題となる諸点について考察を加えるが、それに先立って、「用言の連用形の用法」に関する、私なりの分類を示しておく。



〔A〕 中止法の用法と解釈

中止法の用法は、接続関係と並列関係を示すものに分類される。下位分類としては、さらにそれぞれの用法を負担しているが、このことに関係して、時枝氏は次の見解を示されている。

連用形中止法といふのは、表現を一旦中絶させて、更に別個の表現を起こすための形式であって、そこには、表現が終止せず、更に展開するであらうといふ期待感が存在するのであるが、連用形中止法そのものに、特に後の事柄との間に存する因果関係や条件関係や継起関係を表現する機能があるわけではない。あるとすれば、それ

* 接続関係の用法のなかにも、対等となる場合がある。(注5)

は表現を中絶、中止させる機能である。我々が連用形中止法に何等かの条件を表現する機能があるやうに考へるのは、連用形中止法を通して理解された事実そのものの論理的関係を、表現に投影させて考へるに過ぎない。^(注6)

(「古典解釈のための日本文法」四九〇・至文堂)

連用形による中止という表現の形式そのものと、それが負担している意味的事実関係とは区別して考へるべきものであるという発言である。表現と意味—文法と解釈との微妙な関係に言及した卓見で、たしかにその点は厳密に考へるべきであろう。ただ、解釈という作業は、それ自体が表現をどう読みとるかということにあり、表現を支え、表現の背後にある意味的事実関係や論理的事実関係をも投影させることにあるものであるから、右の見解を十分に考慮に入れた上で、改めて連用形中止法の表現が負担している意味的事実について、その範囲と限度とを考へてみたい。

1 花は散りその色となく眺むれば空しき空に春雨ぞ降る

(新古今集・巻第二)

2 春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげに鶯鳴くも

(万葉集・巻第一九)

3 馬の鼻を並べすでに駆けんとし給へば、今井四郎、急ぎ馬よりとびおり主の馬の口に取りつき…。

(平家物語・巻一〇)

時枝氏の御指摘のように、連用形自体が接続関係の用法を持っていると考へるよりは、前後の表現が、種々の意味を結果として派生させているとみるべきではあるが、右の諸例などの場合には、一般的に「…ソシテ」といった現代語を補入して口訳していることが多い。時間的な前後関係が認められる3のような用例の場合には、明らかに接続機能があると考えられ、連用形による言いさしの中に「ソシテ」といった気分が投影されているとみることに

できる。その意味では、ともに右の例は接続の関係―単純接続の用法であるとしてよい。

- 4 若き人々、悲しきことはさらにも言はず、[Ⓐ]うちわたりを朝夕にならひていとさうざうしく、[Ⓑ]上の御有様など思ひ出で聞ゆれば…。[Ⓒ]
- (源氏物語・桐壺)

- 5 人のそしりをもえはばからせ給はず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。
- (源氏物語・桐壺)

これは単純接続ではなく、条件を構えながら接続語となるもので、4のⒶは、「言うまでもなく」(順接)、「言うまでもないが」(逆接) 両義に解し得るが、後者の方が適当であろうし、Ⓑは「て」を伴っているが、「はなやかな宮中での生活に、いづもなれているので」(順接)の意、Ⓒは「思ひ出で聞ゆれば」にかかる(連用法)とする解もあるが、「(今の生活が)ひどくもの足りなく寂しく」の意(単純接続)に理解することもできるところであるし、また5の例は「遠慮することがおできにならないので」(順接)と解し得るものである。一般的には中止法は単純接続か順接かになることが多いが、4[Ⓐ]および次の例のように、中止法に立つ連用形と下の表現との意味関係によっては、逆接の条件を構えることもある。時枝氏の、「現代語では、『雨が降ってゐるけれども出かける』という意味を表はすのに、連用形中止法だけで『雨が降り、出かける』とは一般に云はない。古文では連用形中止法で逆態条件の事柄をも表現することが出来る。」(「古典解釈のための日本文法」五三二頁・至文堂)という御指摘にあるように、連用形のみで逆接条件を表わすのは、古文独得な現象であるにちがいない。

- 6 知りたりし人、里遠くなりて音もせず、たよりにつけて「何事かあらむ」と伝ふる人におどろきて…。

(更級日記)

7 若宮はいかに思ほし知るにか、参り給はむことをのみなむ思し急ぐめれば、ことわりに悲しう見奉り侍るなど…。

(源氏物語・桐壺)

8 御方方も隠れ給はず、今よりなまめかしう恥かしげにおはすれば、いとをかしううち解けぬ遊びぐさに誰も誰も思ひ聞えたまへり。

(源氏物語・桐壺)

6 は「たよりもしないが」、7 は「もつともなことではあるが」、8 は「かわいらしいが」の意味である。

以上の、連用形にみる逆接の用法は、助詞「て」の用法に近似している。「その頃、高麗人の参れるが中に、賢き相人ありけるを聞し召して、宮のうちに召さむことは宇多帝の御誠あれば」(源氏物語・桐壺)、「しかるをなんぢ、姿は聖に似て、心は濁りにしめり」(方丈記)、「目には見て手には取らぬ月のうちの楓のごとき妹をいかにせむ(万葉集巻第四)などの例がそれである。接続助詞「て」が、完了の助動詞「つ」の連用形にその起源を求め得るとするならば、そこに連用形が負担している共通の用法を見出し得るのである。

一度、叙述を中断させながら、さらに下に続けていく中止法の文表現には、以上のように、ある種の接続助詞を投影させて解釈できるが、一方、次のように単純ではないニュアンスを持った接続語を予想しなければならぬ場合も見受けられる。

9 人のそねみ深く積り、やすからぬこと多くなりそひ侍るに…。

(源氏物語・桐壺)

10 やうやう天の下にもあぢきなう、人のもてなやみぐさになりて…。

(源氏物語・桐壺)

11 今年こそなりはひにも頼むところすくなく、田舎のかよひも思ひかけねば…。

(源氏物語・夕顔)

「その結果」「そのために」「それに」などの語を補うと理解が容易である。前述の5の例「ず」にしても同類である。中止法の複雑さがよく表れていることが理解できるものである。

以上、接続関係に立つ中止法にも、種々の型のあることにふれてきたが、次に述べる対等関係にある中止法の場合、文構造や解釈の点で特に注意を払う必要がある。

対等関係に立つ中止法とは、連用形中止の文節が以下の文節と対等の関係で、二つ以上並立しているものである。つまり文構造の上では、二つ以上の語句が並立しながら、最初の語が連用形で中止しているかたちであるが、その際、実質的には連用形中止の語が、対等関係にあるもう一方の語に下接する、体言・用言・助動詞・助詞を意味上共有すると考えられるものである。したがって読解上、文意や文脈に直接影響する場合があるので、共有する語に着目することが肝要となる。

(1) 体言を共有する場合

二つ以上の用言が、対等の関係にありながら下にくる体言を共有（修飾）する場合、最初の間接的な方の用言が連体形となることなく、連用形で中止する用法である。換言すれば、二つ以上の用言が体言を修飾する場合に、一般的には二つとも連体形となることは少なく、体言に直接続かない用言は、連用形のかたちを取るということである。

1 薄く濃き野辺の緑の若草に後まで見ゆる雪のむら消え

(新古今集・巻第一)

2 幼き心には、身にしみて、恐ろしく、恥づかしく、あさましき思ひまことにせつなるべし。

(徒然草・第一二九段)

(万葉集・卷第三)

(源氏物語・帚木)

(今昔物語)

3 天地の分れし時ゆ神さびて、高く貴き駿河なる富士の高嶺を…。

4 常は少しそばそばしく心づきなき人の、折節につけて出でばえするやうもありかし。

5 若やかにきたなげなき下衆女どもの、白くあたらしきをけに水を入れて持て来て…。

最後の例についてのみ言えば、「若やかなる(白き)下衆女(をけ)」と「きたなげなき(あたらしき)下衆女(を

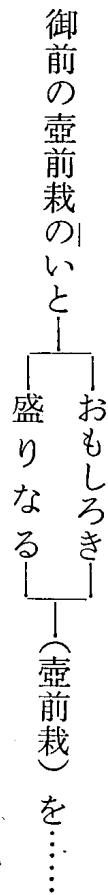
け)」との二つの表現が、一つに統括されるとき、間接的な方の語が「若やかに(白く)」と連用形になるのである。

このことに関しては、理論的には間接的な語もまた連体形をとるべきものであろうし、現にまれにはあるが、

6 命婦はまだ大殿ごもらせたまはざりけるをあはれに見奉る。御前の壺前栽のいとおもしろき盛りなるを御覧
ずるやうにて…。

のような例も見える。

(源氏物語・桐壺)



という意味である。いわゆる「の」は同格と称されるものなので、これを受けた連体形が、たまたま二つ重なった結果による表現と考えられもする。

(2) 用言を共有する場合

対等の関係に立つ語をくくることが用言である場合で、要領は体言を共有する場合と同じである。

7 はしるはしるわづかに見つつ、心も得ず、心もとなく思ふ源氏を…。

(更級日記)

8 さかりにならば、かたちも限りなくよく、髪もいみじく長くなりなむ。

(更級日記)

同時的な事柄を述べながら、間接的な方の語も連用形となるもので、文脈把握の上で、その連用形が修飾し共有する語「思ふ」「なり(なむ)」に留意する必要がある。

(3) 助動詞を共有する場合

すでに述べてきた「体言」と「用言」を共有する場合と形式的に基本的な違いはない。その意味では三者を同一に扱ってもよいと考えられるが、ただ(1)体言の場合と(2)用言の場合は、修飾関係にとどまるものであるに対して、(3)助動詞の場合は、その意味内容にまで実質的に影響を及ぼすものであるという点でへだたりがある。この用法を一般に対偶中止法と言うこともあるが、二つまたはそれ以上の対等の語を、助動詞に帰属させ統括させるとき、前の語を連用形で中止して、結果的には助動詞一つですませる用法である。統括する助動詞は種々あるが、否定・尊敬・使役・受身・意志・願望などの意味の場合が多く、その点で解釈上重要なものであるといえる。

9 萩の花匂へる宿を朝廷に出で立ちならし夕庭にふみ平らげず…。

(万葉集・卷一七)

10 松も引き若菜も摘まずなりぬるをいつしか桜はやも咲かなむ

(後撰集・卷第一)

11 たとひ舞を御覧じ歌を聞し召さずとも、ただ理を枉げて召し返して…。

(平家物語・卷第二)

12 われいかにもなりなむ後は、堂塔もたて孝養をもすべからず。

(平家物語・卷第六)

最後の例は助動詞が複合しているが、右の用例はすべて共有する語が、「打消」の意である。説明を加えるまでも

あるまいが、9の歌は越中に在任中の大伴家持が、弟の死を悲しんで詠んだもので、「朝庭に出で立ちならさず夕庭にふみ平らげず」とでも解され、また10の歌は朱雀院が子の日にお出ましになったのに、都合が悪くてお供できなかった左大臣が詠んだもので、「松も引かず若菜も摘まずなりぬるを」というように、助動詞「ず」を上での連用形にもかかわらせて訳出する必要があるのである。

13 それは世を恨み身を歎いたれば、様をかふるもことわりなり。
(平家物語・巻第一)

14 若きほどは、諸事につけて身を立て、大きな道をも成じ、能をもつき、学問をもせむと…。

15 とぶ鳥は翼を切り、かごに入れられて、雲を恋ひ野山を思ふ憂ひやむときなし。
(徒然草・第一八八段)

統括する語が、それぞれ完了・意志・受身の助動詞となっている例である。

特に統括する語が、打消の助動詞の場合は、解釈上注意しなければならない。しばしば引用される例であるが、
16 よき人の、のどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の光もひとときはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきららかならねど、木立ものふりて…。
(徒然草・第一〇段)

にしても、「(よき人の、のどやかに住みなしたる所は)当世風デ、華美デハナイガ」と訳したりすると、一見、「今めかしく」が述語の機能を果しながら、そこで中止するような錯覚を生むので注意が必要である。

なお以上の対偶中止法と形式上はよく似た表現でありながら、全く異なった意味を持つかたちがある。これは打消の助動詞で統括された部分を名詞的に扱うべきもので、

17 散り散らず聞かまほしきをふるさとの花見てかるへ人もあはなむ

(拾遺集・巻第一)

18 かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる

(古今集・巻第一四)

19 散り散らずおぼつかなきは春がすみたったの山の桜なりけり

(新古今集・巻第二)

などがそれである。17と19は、「散ッテイルダロウカ、散ラナイデイルダロウカトイウコト(ヲ)」、18は「思ッテ

イルダロウカ、思ウナイデイルダロウカトイウコト(ヲ)」の意味である。また、次の

20 雨にむかひて月を恋ひたれこめて春の行方を知らぬも、なほあはれになさけ深し。(徒然草・第一三七段)

の場合は、形の上では対偶中止の場合と同じではあるが、助動詞「ぬ」が「恋ひ」にも関係するものではなく、

対等の関係に一応はありながらも、「(コト)も」によって統括されていると考えれば、体言を共有する〔A〕のケース

と見ることが可能である。

(4) 助詞を共有する場合

21 われはさやは思ふなど争ひにくみ、さるからさぞともうち語らば、つれづれ慰まめと思へど…。

(徒然草・第一二段)

などがそれである。

〔B〕 連用法の用法と問題点

① 古典語における複合動詞をめぐって

時枝氏は、述語の修飾語となる連用形のなかでも、特に動詞の場合に関して、次のように説明されている。

いときなき初もとゆひに長き夜を契る心は結び籠めつや（桐壺一ノ二二）

右の例文中の「結び」は、動詞の連用形で、下の「籠め」の修飾語として用いられてゐる。一般に複合動詞の上の動詞は、下の動詞の連用修飾語と見ることが出来る。

思ひやる　　思し出づ　　取り寄す　　添ひ臥す　　見渡す

（「古典解釈のための日本文法」・三七ペ・至文堂）

一般に、「動詞A＋動詞B」のかたちの場合、AがBを修飾していると見るか、ABを一つの動詞（複合動詞）と見るかは、語源意識の度合と関連して甚だ微妙なものがある。連用法とは用言の連用形が下にくる用言に続いていく用法であり、「国語学辞典」（一六七ページ・東京堂）には、

連用形には中止法（松青く、砂白し。）などのほかに、連用法（松青く立てり。）などもある。動詞にも連用法（「急ぎ開きてみれば、」など）というべきものもあるが、これはどの動詞にもあることではない。連用形という名は、「降りつづく」などの用法によるのであるが、現在ではこういうのは複合語として扱って、「降り」を一語と見ない。

という説明がある。これによると、①連用法は形容詞や形容動詞の連用形と一部の動詞の連用形に見られる用法で、②動詞の連用形が動詞に続く場合は、複合動詞と見るのが現在の扱い方である、と敷衍することができる。これは、時枝氏の「一般に複合動詞の上の動詞は、下の動詞の連用修飾語と見ることが出来る」という考えと微妙な違いがあるが、もちろん決定的なものではなく、動詞の連用形に、修飾機能を持った連用法がある（時枝説）とす

るか、部分的には認めるが、ほかは一語の複合動詞とする（国語学辞典）かの相違にすぎない。問題は複合語を成立の原点でとらえるか、結果としてとらえるかの違いと考えることができる。動詞の場合における「A+B」の両者が、連用修飾関係↓（語源意識とか修飾意識の欠如）↓複合動詞という変化が予想されるが、後でふれるが、古典語の場合には、現代語と異なって、簡単に複合語であると断定しえない事情もあるので、特に古典語の場合は、時枝説のように考えた方が妥当ではないかと思うわけである。

ところで、

1 またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして炭もてわたるも…。

（枕草子・第一段）

2 いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせてごらんずるに…。

（源氏物語・桐壺）

右の二例は、ともに「急イデ（ソシテ）オコシテ」、「急イデ（ソシテ）参内サセテ」のように、接続関係の用法を持った中止法とは考えられないし、むしろ修飾関係を負担する動詞連用法とみてよいケースである。一方、一語の複合動詞とみるのも、語としてのまとまりや熟度の上で無理と言うべきであるし、特に、動詞以外の用言の連用形が、その下に他語を介在しても不都合ではない事実——「花おもしろく咲きたり」を「おもしろく花咲きたり」としても成立する——に着目して、この例の場合も、「急ぎ火などおこして」、「急ぎ（ちごを）参らせて」というぐあいには、間接修飾語としてみても文意が成立することを考え合わせると、複合動詞として扱うのは当を得たものではあるまい。

動詞連用形の場合、どの範囲、どの程度までを複合語として扱うかという認定の問題が重要である。現代語で、

たとえば「降りつづく」、「見損なう」、「取り出す」などの場合上下二語の間に他語の介在することは考えられないから、一語の動詞と考えることが可能である。しかし古典語の場合は、現代語の意識によって律することは当を得ないこともあり、むしろ二語として扱うべきものが見受けられそうである。「読み通す」などは、「は」「も」などの助詞の介入を許さないが、古典語の次の例の場合には、助詞や尊敬・謙讓の意の語などが介在するのがふうなのである。いま「源氏物語」に徴してみても、

- 1 御覽じだに送らぬおぼつかなさ……。(桐 壺)
- 2 見だに送りましたまへかし。(須 磨)
- 3 思しもよらずかし。(空 蟬)
- 4 承りも果てぬやうにてなむまかではべりぬる。(桐 壺)
- 5 宮城野の露吹きむすぶ風の昔に小萩がもとを思ひこそやれとあれど、え見たまひ果てず。(桐 壺)
- 6 もの思うたまへ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたう侍りけれ。(桐 壺)
- 7 え見たてまつりつけぬに……。 (桐 壺)

など枚挙にいとまがない。こうした事實は、現代語の感覚からすると説明に苦しむものである。複合語は、その成立の当初においては、一般にAB二語の原義がかなり明確で、ともに意識されたものであったろうが、次第にその独立性を失いながら、新しい意味を派生する傾向にある。つまり、「A+B」の対等な関係にあったものが、 $[A+B] \rightarrow C$ という具合に融合し変化していくものと推測されるのである。たとえば、名詞における「たそがれ

(誰そ彼れ)、「さかな(酒菜)」などがそれであろう。動詞の場合は、複合語となってもAB二語の固有の意味がそのまま残るが、かりにAB二語の間に助詞「て」を介在させた場合、

取り出す―取りて出す 見送る―見て送る さし出す―さして出す 思いやる―思いてやる

などを考えてみると、上下では、両者の意味が異なってしまうか、または、ことばとして成り立たなくなるか、いずれかの結果となる。古典語では、助詞が介在してもそのような結果が起こらないことを考え合わせると、一つの複合語として現代語なみに取り扱うことは適當ではない。あるいはまた、そうした表現が当時の慣用的なものであったにしても、完全な複合動詞としての意識の下で使用したものであろうかどうかは疑問で、むしろ時枝氏の御指摘にもあるように、AがBを修飾する関係に立っていたものであろうと推察されるのである。

形容詞と形容動詞の連用形は、連用法としては、すべて下の用言を修飾限定する場合にかぎられる点で、動詞にみられるような問題はない。

1 夕日のいとほなやかにさしたるに、桜の花残りなく散り乱る。(更級日記)

2 様体ささやかに、いみじう見めいたり。もの言ひたるも、らうたきものながら、ゆゑゆゑしく聞ゆ。(堤中納言物語)

3 言ひ知らずをかしげにめでたく書きたまへるを見て、いとど涙を添へまさる。(更級日記)

右の例は最も一般的な用法である。2の例の「ささやかに」は、接続関係に立つ中止法で、「様体」と主語述語の関係にあり、また3の例は、「をかしげに」と「めでたく」が対等語として「言ひ知らず」によって修飾され、全体

が「書きたまへる(を)」を修飾している関係である。換言すれば「をかしげに」は中止法、「めでたく」は連用法の用法で、全体が下の「書きたまへる(を)」を共有していると説明してよいものである。連用形の用法に関連して、次の例などは問題が残りそうである。薫の君が宇治八宮を訪れた場面で、

4 忍びたまへど、御けはひしるく聞きつけて、宿直人めく男なまかたくなしき出で来たり。

(源氏物語・橋姫)

右の形容詞連用形「しるく」は、中止法とも、連用法ともいずれにも解すことができそうである。日本古典文学大系では、「御けはひ、しるく聞きつけて」というように連用法に解しているが、連用形「しるく」を中止法にとつて、「御けはひ」の述語となりながら言いさしたものととも考えられる。

⑥ 連用法における修飾のありかた

同じ連用法ではあっても、修飾のしかたや内容などの点で、いくつかの違いが見受けられる。

(1) 動作・状態の説明

下の用言の動作や状態を修飾するもので、連用形本来の用法である。形容詞と形容動詞に主として見られるもので、この場合には、下にくる動詞は、思索や判断を伴わないものであることがふつうである。

1 にわかにしもあらぬ匂、いとなつかしう住みなしたり。「門よくさしてよ」。(徒然草・第一〇四段)

2 さかしう宣ひつれど、車より落ちぬべうまどひたまへば…。(源氏物語・桐壺)

助動詞の連用形も、右の例のように連用法に立つ。「べし」のほか「ず」「まじ」「たし」「ごとし」などもそうである。

ある。

(2) 内容・心理の説明

形式上は(1)と変わらないが、読解止とくに注意を要する用法である。連用形が、下の動詞「思ふ・見る・言ふ」などの具体的な内容や心理を表わしているとみられるもので、単なる連用修飾関係に立つものではない。

3 この御方の御いさめのみぞ、なほわづらはしう心苦しう思ひ聞えさせ給ひける。
(源氏物語・桐壺)

4 ことわりになしう見奉りはべるなど…。
(源氏物語・桐壺)

5 わりなく思ほしながらまかでさせたまひぬ。
(源氏物語・桐壺)

6 かつは人も心まわく見奉るらむと思しつつまぬしもあらぬ御気色の…。
(源氏物語・桐壺)

以上、「桐壺」に限ってみたが、こうした用例はこれ以外にも多く見受けられる。3と5の例は、「思う」または「思ほす」の主格である「帝」の心理内容を、それぞれ「わづらはしう心苦しう」、「わりなく」という連用形で説明したもので、実質的には、「(帝は) なほ『わづらはしう心苦し』と思ひ聞えさせ給ひける」、「(帝は) 『わりなし』と思ほしながらまかでさせたまひぬ」という表現と同義と考えられるものである。5の例と同じ形容詞を用いた例と比較すると、このことはより明確である。つまり、同じ「桐壺」であるが、

a (帝は) わりなく思ほしながらまかでさせたまひぬ。(用例5と同じ)

b (帝が) わりなくまづはさせたまふあまりに…まづ参う上らせたまふ。

の二文は、形式上はともに連用形「わりなく」の下に動詞をとっているが、aの連用形は前述のように「帝」

の心理内容を具体化したもので、直接話法式に「わりなしと思ほしながら」と置きかえられるものであった。ところで、bの連用形は、下の「まつはす」を単純修飾し、その状態を限定するにとどまるもので、「(帝が)むやみにお側におつきそわせになった結果…」という意味となる。この場合は、直接話法式に「…」と「のかたち」に置きかえることは不可能で、その点からも心理や内容の説明を負担した連用形との違いが確認できよう。

* * * * *

以上、解釈と文法との関係について管見を述べたが、部分的にかなり技術論的または方法論的な事ながらに重点が置かれ、その結果、学問的な要素が除外されたきらいがなかった。現代語との接点を求めるのが「解釈」ということである以上、ある程度不可避なことかもしれないが、その点、自覚を新たにしたいと考えている。御教示を賜れば幸いである。

注1 a b二様の解釈に関して、松尾聡氏は、「中古語としてなら、『気色だつ折も折、ちようどそのとき』のような意に用いられたらしく、ここもその意として用いてあるものとみておく。」(『校註徒然草』一三二・笠間書院)との御見解を示されている。

2 坂本元太郎・『連体格助詞』の周辺・札幌大学紀要・第二号(昭和四六年三月)所収。

3 時枝誠記氏・『古典解釈のための日本文法』一四四頁・一六三頁・至文堂

4 「富士の山はこの国なり」の13の例にしても、終止形「なり」が存在の意を表わしているとするよりは、「富士の山(のある国)はこの国なり」の省略であるとも考えられるが、連用形が存在の意を表わしている、「俊蔭、もとの国なりしとき、心を入れしものは…」(宇津保物語)のような例もある。

5 たとえば、「夏虫、いとをかしうらうたげなり」(枕草子・第四三段)などがある。

6 なお時枝誠記氏は、さらに続けて具体例をあげ、次のように説明を加えられている。

例へば、

鳥鳴き(て)、花笑ふ。

雨降り(て)、地固まる。

のやうな場合に、前者の「鳴き」は、単純な判断の中止を表現し、後者の「降り」は、判断の中止を表現すると同時に、「地固まる」といふ事実に対する条件関係を表わしてゐるやうに考えるのはそれであつて、表現の形式そのものとしては、単に表現の中止を表わしてゐるに過ぎない。ただここに問題となることは、連用形中止法によつて、どれだけの事実関係は表現出来るが、それ以上のことは出来ないといふやうに、連用形中止法によつて表現される事実そのものの幅といふものを明かにして置く必要がある。

〔古典解釈のための日本文法〕・四九ページ―五〇ページ・至文堂